北本の縄文時代の遺跡

年　代	時　期	主な形式名	主な遺跡	所在地
16000年前	草創期	―	―	―
9000年前	早　期	野島　他	①雷電遺跡	高尾9丁目
6000年前	前　期	関山Ⅱ	②№82遺跡	石戸宿8丁目
		関山Ⅱ	③庚塚遺跡	石戸宿5丁目
		諸磯ｂ	④氷川神社北遺跡	石戸5丁目
5000年前	中　期	勝坂～加曾利ＥⅢ	⑤デーノタメ遺跡	大字下石戸下
		加曾利ＥⅠ	④氷川神社北遺跡	石戸5丁目
		加曾利ＥⅡ	⑥三五郎山遺跡	本町1丁目
		加曾利ＥⅢ～ＥⅣ	⑦上手遺跡	古市場1丁目
		加曾利ＥⅢ	⑧提灯木山遺跡	二ッ家3丁目
4000年前	後　期	堀之内Ⅱ	⑨鉄砲宿遺跡	高尾3丁目
		堀之内Ⅰ～加曾利ＢⅠ	⑤デーノタメ遺跡	大字下石戸下
		安行Ⅰ、Ⅱ	⑩宮岡氷川神社前遺跡	荒井1丁目
3000年前	晩　期	安行Ⅲｂ～Ⅲｄ	⑩宮岡氷川神社前遺跡	荒井1丁目

引用・参考文献

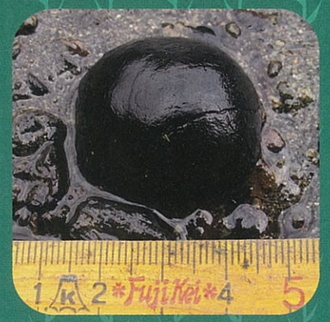
『デーノタメ遺跡発掘調査概要報告書』
北本市埋蔵文化財調査報告書 第21集
北本市教育委員会 2017

（本文中の引用文献は本書に掲載）

デーノタメ遺跡の世界
平成30年2月28日発行
北本市教育委員会文化財保護課
〒364-8633　埼玉県北本市本町1丁目111番地
電話048-594-5566（ダイヤルイン）
E-Mail a04700@city.kitamoto.lg.jp
印刷　AERIS

文化庁補助事業　（地域の特色ある埋蔵文化財活用事業）

デーノタメ遺跡の世界



クワ　ニワトコ　クルミ　マタタビ　ウルシ　ダイズ　アズキ　トチ　コウゾ　クリ

2018
北本市教育委員会

Ⅰ　1200年間続いたムラ

1 関東最大級の環状集落

デーノタメ遺跡は埼玉県北本市の南部、下石戸下地内に所在し、江川という小河川の支流を北に臨む台地上に展開しています。

この遺跡では約5,000年前の縄文時代中期に、2、3軒で10人程度のグループが二つの小さな集落を営みはじめます(勝坂期)。台地の縁辺に分かれて住んでいたようで、広い空間を挟んで対峙していました。図2はこの時期の住居跡です。

それから約200年経つと、ムラに定住する人数が大幅に増加します(加曾利ＥⅠ期)。おそらく一時期に約50人以上の人々が生活していたと思われ、竪穴式住居が台地上に広くつくられるようになります(図3、4)。

この時期には、集落の中央に広場を設け、それを取り囲むように住居が配置されました。上空から見ると、まるで穴の開いたドーナツのように住居が広がっています。

こうした集落の形態を「環状集落」と呼んでいます。デーノタメ遺跡の集落は最大径が南北方向で約210m、東西方向で約140mの規模になります。これは大宮台地上ではまれに見る大集落で、関東地方でも200mの規模を超える集落はあまり見当たりません。現時点では「関東最大級」の縄文集落と位置づけられています(図1)。

この大きなムラはそれから約500年間栄えました。しかし、今から約4,300年前になると極端にムラが小さくなり、最盛期の5%程度まで縮小してしまうようです。この後は、しばらく広い台地上に数軒程度の小さな集落が続きます。

2 縄文時代中期から後期へ

縄文時代後期には、再び集落が拡大するようになります(図1)。

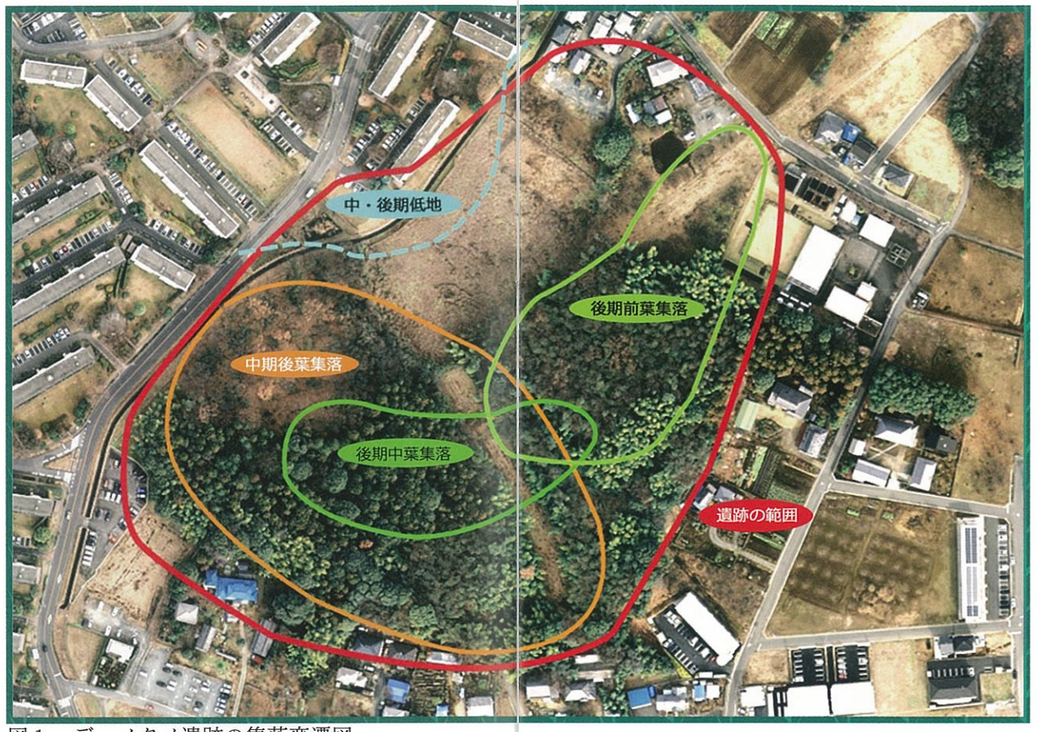


図1　デーノタメ遺跡の集落変遷図

図2　勝坂期の住居跡

図3　加曾利ＥⅠ期の住居跡

今から約4,000年前になると遺跡の北東部に集落が現れ、まとまった人数でムラをつくりはじめます。集落は北側の低地に沿いながら、徐々に南西に進出していき、中期に環状集落のあったエリアまで居住範囲を伸ばします。後期の集落は、低地に沿って弧状に範囲を広げます。

その規模は集落の北東端と南西端を結ぶと直線で約270mになります。後期の集落としては規模が大きいと考えられます。そして、今から約3,800年前までムラは続きました(図5、加曾利ＢⅠ期)。

このように、デーノタメ遺跡の縄文時代の集落は約1,200年にわたって変遷しながら存在し続けていたのです。

図4　土器捨て場にされた住居跡　(加曾利ＥⅠ期)

図5　加曾利ＢⅠ期の住居跡

コラム①

デーノタメって何

「デーノタメ」は湧き水によるタメ池のことで、昭和40年代まで存在していました。このユニークな名前は地元に古くから伝わる地名で、由来については、二つの説があります。

一つは湧き水によってつくられたタメ池という意味です。泉はデイ、あるいはデスイとも呼ばれ、「デスイのタメ池」とう理解です。もう一つは、付近の小字に「台原」という地名があり、地元ではこれを「デーッパラ」と訛ります。「デーッパラのタメ池」を略してデーノタメという解釈です。

いずれにしても、縄文人にとっては重要な水源だったと想像されます。

昭和40年代のデーノタメ付近
(吉川國男氏提供)

Ⅱ　縄文土器と生業の道具

図６　勝坂式土器

図７　加曽利ＥＩ式土器

図８　加曽利ＢＩ式土器

１ デーノタメ遺跡の縄文土器

縄文式土器は今から１万６千年前に発明されたといわれます。その後、さまざまな形や文様の土器がつくられました。

デーノタメ遺跡から出土する土器は、中期のものでは厚手で大型のものが多く、後期になると薄く精巧につくられる土器が現れます。

勝坂式土器（中期）

土器の表面には縄目模様が少なく、粘土紐を貼り独特の文様を描いています。出土土器にはヘビがとぐろを巻いたような文様が多く描かれていました（図7）。

また、浅鉢形土器の一つには、カエルが泳いでいるような姿や、クモのようなデザインが見られます（図10）。生き物の強い生命力にあやかろうとしたのでしょうか。

加曽利Ｅ式土器（中期）

土器が大型化します。粘土紐によって渦巻きや長方形の区画を設け、内部を縄文で埋めるようなデザインが多く見られます。

熱効率を高めるため、炉の枠に転用されたり、棺として再利用されたと思われる土器も出土しています(図8)。

加曽利Ｂ式土器（後期）

表面が黒く滑沢に仕上げられた土器群で、文様は平面的になりますが、沈線によって幾何学的に描かれています。浅鉢形の土器の内面には直線的な文様を描いています(図9)。

図９　勝坂式土器(浅鉢)の展開図

２ デーノタメ遺跡の石器

縄文時代は金属の道具がありませんでした。掘る、削る、切る、磨く、挽くなどの作業は石の道具によって行われていました。

図10　打製石斧(掘る)

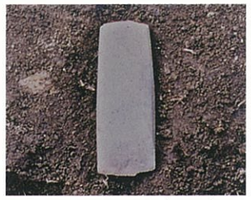


図11　磨製石斧(切る)

図12　石鏃(射る)

図13　石鏃(射る)

図14　磨石(磨く、挽く)

図15　石皿(挽く)

３ 呪(まじな)いの道具

デーノタメ遺跡からは装身具なども見つかっています。これらは縄文人が祈りをささげる際に利用した道具であると考えられます。

図16　耳飾(ピアス)

図17　垂飾(ペンダント)

図18　垂飾(ペンダント)

図19　小型磨製石斧

図20　小型石棒

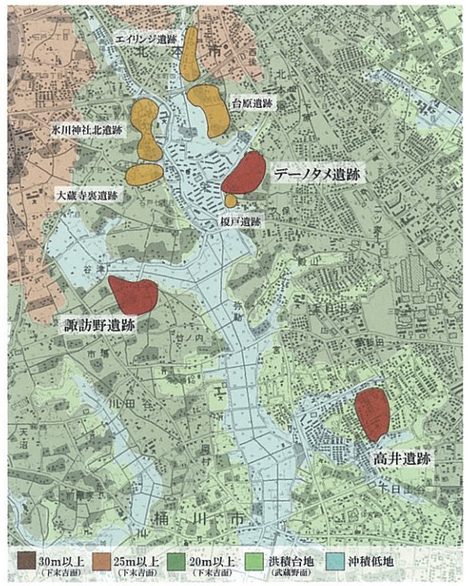
コラム②

密集する大環状集落群

デーノタメ遺跡が所在する江川上流域には、縄文時代中期の大環状集落が密集しています。

桶川市域の江川左岸にある高井遺跡では、縄文時代中期の住居群が100軒以上も調査されています。また、諏訪野遺跡では、長径180mの縄文時代中期の環状集落の存在が明らかにされています。このように、デーノタメ遺跡を含めた三つの大集落が約2km圏内という至近に存在する例は珍しいようです。

これらの遺跡はそれぞれが同時期に存在しており、集落間の交流を考えるうえで、注目すべきエリアといえます。



江川上流域の縄文時代遺跡の分布

Ⅲ　縄文のタイムカプセル

集落下の水辺を掘る

デーノタメ遺跡の特徴の一つは、集落のある台地の下に縄文人が利用した水辺が残っていることです。平成20年の第4次調査では、この水辺を170㎡ほど調査しました。

このエリアは、デーノタメの湧水が流れ出したすぐ下流にあり、調査では縄文時代中・後期の泥炭層が良好に堆積していることがわかりました。泥炭層では地下水によって空気が遮断され、微生物の活動が弱まります。その結果、地上では失われてしまう樹木や種といった有機質の遺物が残されています。泥炭層はまさに「縄文のタイムカプセル」の役割を果たしているのです（図21）。

調査区は水が湧き出す低湿地のため、調査は常にポンプで水を汲み上げ行いました。図22は第４次調査区の全体図です。調査区の大半は縄文中期の泥炭層に覆われ、南側の一部には後期の泥炭層が残っていました。中期の生活面では6基のクルミ塚、2条の溝跡、砂道等があり、後期の生活面には溝跡やトチ塚、木組遺構、土坑等の遺構が確認されています。

調査を開始して驚いたのは、泥炭層の中からは、さまざまな遺物が続々と出土したことです。とくに目立つのは縄文土器とオニグルミの核でした(図23)。縄文土器が集中する様は、まるでぬかるみに撒いた瓦のように、足場を固めるために土器を再利用したかのようです。土器はいずれも破片で、使用時に破損した土器片を廃棄したと思われます。また、これらの土器片はほとんど接合しないことから、集落ですでに破片となった土器片をアトランダムに運んだのでしょう(図24)。

土器の中で注目されるのは、漆を塗った土器を含んでいることです(図25)。赤と黒の漆を塗った土器は浅鉢に限定され、在地の加曾利E式土器に多い傾向を示していました。縄文の鮮やかな色彩が現代に蘇ったのです。

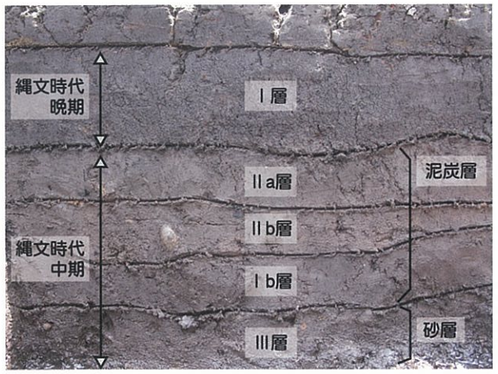


図21　　泥炭層の堆積状況

図23　勝坂式土器とオニグルミ

図24　土器集中

図25　漆塗土器の出土状況

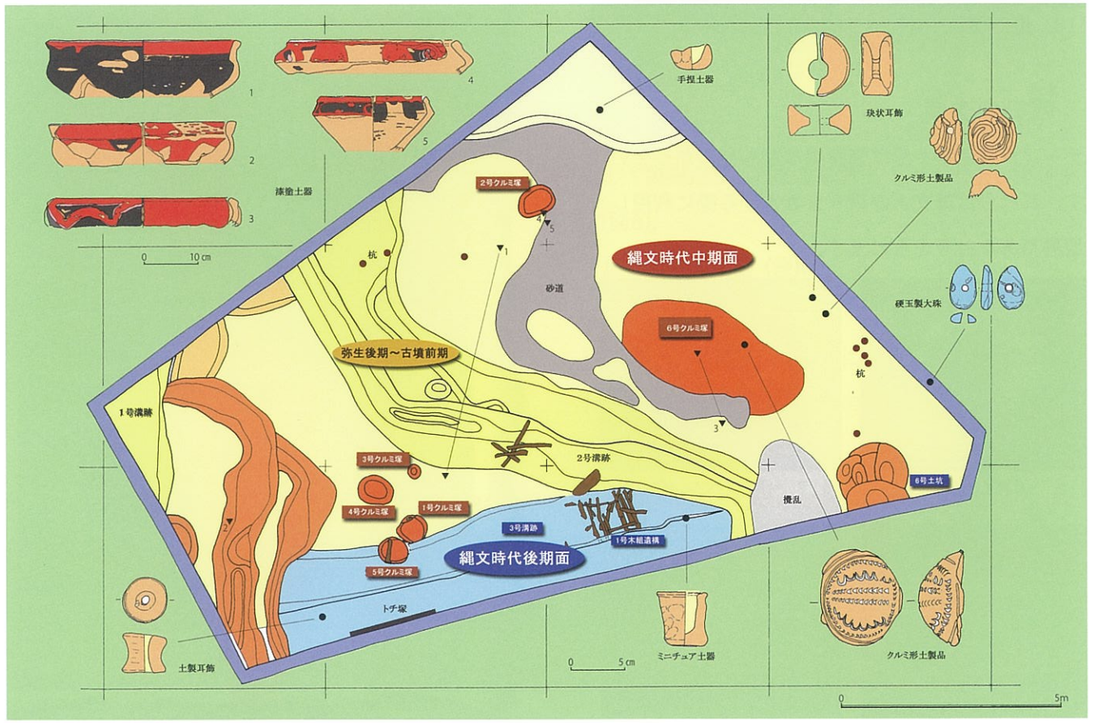


図22　第４次調査区と主な出土遺物

図26　第４次調査区の調査風景

Ⅳ　縄文の植物利用をさぐる

1 ハンノキ林からクルミ林へ

第4次調査では当時の植生を明らかにするため、埼玉県立自然の博物館の協力を得て花粉分析を行いました。その結果の一部が図27です。

この図によると、集落が営まれた当初は低地にハンノキ林が広がっていましたが、すぐさまクルミ林が逆転している傾向がうかがえます。おそらく、縄文人がハンノキ林を伐採し、食料となるクルミ林に仕立てたのでしょう。この結果は調査区からクルミの核が2万点以上出土している状況とつじつまが合っています。

出土するクルミはオニグルミとヒメグルミの2種で、大半はオニグルミです。調査区では、このクルミの核等を廃棄したクルミ塚が6基検出されました(図28)。その形態は①皿状のもの、②土坑状のもの、③掘り込みのないもの、④大規模なもの、の4タイプです。

クルミ塚から出土するクルミ核は、①完形・自然半割、②打撃痕、③動物食痕、の3種で(図29)、その割合は図30のように、人が打撃によって割ったものが多い傾向を示します。

また、クルミ塚の中からは、図31のようなベリー類の種実も含まれています。コウゾ属、ニワトコ、クワ属、マタタビ属の4種が多く、縄文人がこれらのベリー類を利用していた可能性が考えられています。

なお、クルミ塚周辺ではクルミ形土製品(図32)、ヒスイ製大珠、玦状耳飾等が出土していて、ここがクルミの採集地であり、クルミ核や土器の廃棄場であり、祭祀の場であった可能性がうかがえるのです。

図28　2号クルミ塚

図29　クルミ核の種類

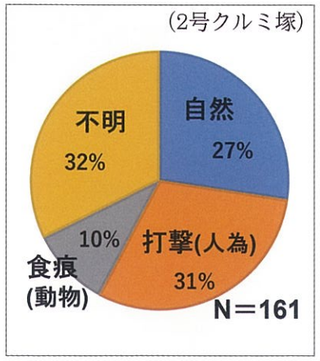


図30　クルミ核の割合
(目黒2017)

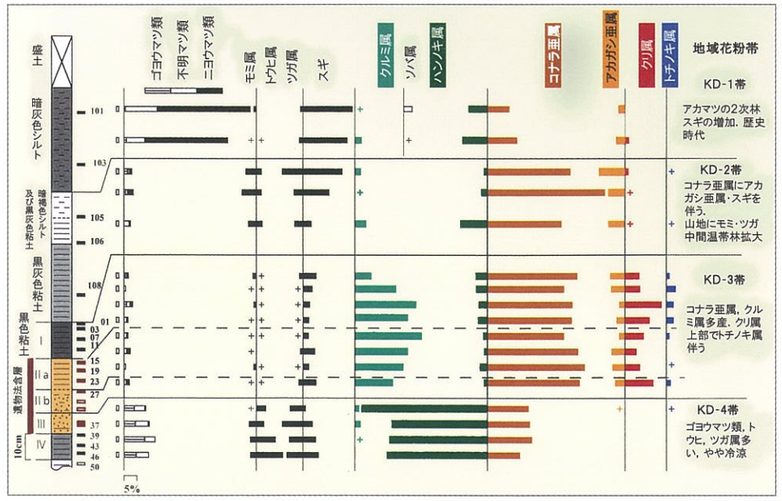


図27　花粉分析のダイアグラム(楡井2017)

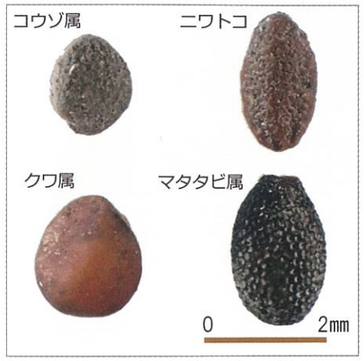


図31　クルミ塚出土ベリー類

図32　クルミ形土製品

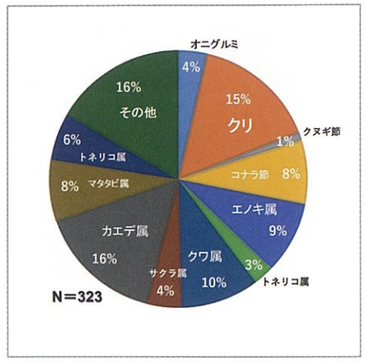


図33　自然木の樹種と割合
(能城2017)

2 広がる落葉樹とウルシの栽培

次に台地の植生を見てみましょう。図27によれば、遺跡が営まれるようになると、コナラ亜属とクリ(図34)、遅れてトチノキが増加してきます。最も多いコナラ亜属は風媒花ですが、クリとトチノキは虫媒花のため、この2種はグラフの割合以上に多かったと考えられます。

調査区から出土した自然木の割合はカエデ属が16%、クリ15%、クワ属10%、エノキ属9%という結果で、他の遺跡同様にクリは多いのですが、カエデ属が多いのが特徴となっています(図33)。秋になると、きっと集落の周辺は紅葉で彩られたはずです。ちなみに、人が加工した木材ではクリ20%、カエデ属16%、クワ属15%の割合です。

図34　クリ

図35　漆塗土器

また、すでに述べたように第4次調査では多量の漆塗土器が出土しています(図35)。この漆塗土器は平滑な器面に黒漆を塗り、その上に赤漆で文様を描くものと土器の隆帯に赤漆を塗り、文様を際立たせるものなどがあります。

デーノタメ遺跡では、これまでに花粉、木材、漆製品の3つのカテゴリーでウルシが確認されています。このため、集落ではウルシの木を栽培管理し、ウルシ液を採取し、漆製品を製作していた可能性が高いのです。

コラム③　ウルシの里を訪ねる(大子町)

ウルシのことを英語ではjapanと書きます。これはウルシが日本を代表する基層文化の一つだからでしょう。今でこそ、漆は特定の地域に伝わる工芸というイメージがありますが、足元の遺跡に漆の文化が眠っていたことは驚きです。

ウルシは1万2千年前の鳥浜貝塚(福井県)で確認されていて、大陸から伝わったのか否かが争点になっています。

現在、関東では茨城県と栃木県で「大子漆」の栽培が行われています。大子漆は、かつては日本一の生産量を誇っていました。その後、生産量は減少しましたが、今では生産者や住民、行政が一体となって、この漆文化の継承に力を入れています。

管理されたウルシ畑

3 マメ栽培の痕跡

近年、縄文時代のマメ栽培に関心が集まっています。第４次調査ではクルミ塚等の覆土をサンプリングし、水洗選別を行ったところ、炭化したアズキ亜属の種子が検出されました。炭化アズキの大きさは長さの平均で4.42㎜のため、野生のヤブツルアズキよりもやや大きく、栽培種との中間型といわれています(佐々木2017)。

マメの痕跡は土器の表面に残された圧痕としても残されていて、「圧痕レプリカ法」による調査では、縄文中期の土器にアズキ亜属とダイズ属の圧痕が検出されています。図36は第２次調査７号住居跡出土の勝坂式土器で、アズキ亜属の圧痕が残っています。

また、図37は２号クルミ塚から出土した勝坂式土器の小片で、断面には大型ダイズ属の圧痕が残っていました。この圧痕は長さ11.73㎜、幅4.98㎜、厚さ3.34㎜で、山梨県酒呑場遺跡で報告された大型ダイズ属の大きさに匹敵しています(図38)。2号クルミ塚は年代測定で、「4980-4860(90％)cal BP」という結果が出ているため(工藤2017)、今から約5,000年前には、大宮台地でもダイズが栽培され、大型化していたことがわかります。

なお、調査区の泥炭層からは昆虫遺体も検出されています。森勇一氏の調査によれば、最も多いのはヒメコガネとホシテンハナムグリの2種です。このうち、マメ科の害虫であるヒメコガネの英名はSoybeen beetle(ダイズのカブトムシ)といいます。縄文人が集落の周りで、ダイズを栽培していたと思えてくるような結果です。

図36　アズキ亜属の圧痕

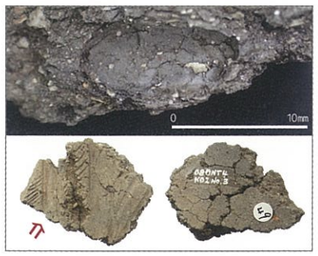


図37　ダイズ属の圧痕

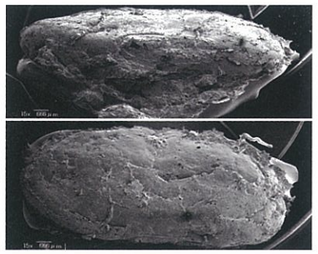


図38　電子顕微鏡写真
熊本大学小畑弘己（科学研究費助成事業成果）
撮影者　山本華

コラム④　野生のダイズとアズキを探してみよう

植物の観察は楽しいものです。収穫できる植物であれば、さらに楽しみが増してきます。市内の植物を調査すると、ダイズの原種であるツルマメとアズキの原種であるヤブツルアズキが自生していることがわかりました。荒川の河川敷に行くと、ツルマメはあちらこちらで観察できますが、ヤブツルアズキは自生地が限定されていました。ともに8月には花を咲かせるので、確認するのが容易です。収穫期は10月です。試しに収穫して枝豆やお汁粉をつくってみると、とても美味しくて驚かされます。

ツルマメ

ヤブツルアズキ

荒川河川敷の自生地

4 拡大するトチノキ林

第４次調査区の南側は縄文時代後期の泥炭層が残っていました。後期の泥炭層が中期と異なる点は、トチノキの皮が多く出土することです。花粉分析でもトチノキの花粉がとても多い結果となっているため、低地と接する台地縁にはトチノキ林が拡大していたと考えられます。

調査区から出土するトチノキの種子は、人為的に破砕したものが大半ですが、中には完全なものや未熟な果実を含んでいます(図39)。このことはトチノキ林がこの場所に繁茂していたことを物語っているのです。

また、調査区の南壁にはトチノキの皮が厚く集積していて(図40)、トチノキの加工にともなうトチ塚の痕跡であると想定されます。

なお、このトチ塚に接する3号溝跡には、図41のような木組遺構が設けられ、遺構の内外にはトチノキの皮が集中していました。トチノキの水さらしの施設であった可能性があります。集落から低地へ降りてきた縄文人が、ここでトチノキの皮を剥き、加工する姿が浮かんでくるようです。

図39　トチノキの種子

図40　トチ塚の断面

図41　木組遺構

コラム⑤　遺跡の土を洗ってみると…

サンプリングした遺跡の土を洗い出すと、さまざまな植物遺体がザルの中に残ります。これを丁寧に選別すると、木の小枝や皮の他に植物の種や実が含まれています。

縄文後期の3号溝跡を覆っている最下層(a2層)では、300ccの土のサンプルを洗い出したところ、何とニワトコ約950点、コウゾ属約580点が検出され、クワ属42点、マタタビ属36点と続いていました。この4種は、縄文中期のクルミ塚から出土する上位4種と同じですが、ニワトコとコウゾ属が突出しています。コウゾ属はヒメコウゾでしょうか。

これほどベリー類が集中している状況は、縄文人がこれらを加工してジャムや酒づくりに利用した後、廃棄したのかもしれません。とても興味がもたれます。

サンプル土の洗い出し

洗い出された植物遺体

ニワトコ

コウゾ属